

奥の細道

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、

行きかふ年もまた旅人なり。

舟の上に生涯を浮かべ、

馬の口とらへて老いを迎ふる者は、

日々旅にして、旅を栖とす。

古人も多く旅に死せるあり。

予も、いづれの年よりか、

片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、

海浜にさすらへ、

去年の秋、

江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひて、

やや年も暮れ、

春立てる霞の空に、

白河の関越えんと、

そぞろ神がみのものにつきて心こころを狂くるわはせ、

道祖神どうそじんの招まねきにあひいて取とるもの手てにつかず、

ももひきの破やぶれをつづり、

笠かさの緒おつけかへて、三里さんりに灸きゆう据すうるより、

松島まつしまの月つきまづ心こころにかかりて、

住すめる方かたは人ひとに譲ゆずり、杉風さんふうが別野べつしよに移うつるに、

草くさの戸とも住すみ替かわはる代よぞ雛ひなの家いえ

表おもて八句はつくを庵いおりの柱はしらに掛かけおく。